

Mahathir Mohamad

Terrorism and the Real Issues

Pelanduk Publications, 2003

本書は、マレーシアのマハティール前首相が、1999年から2003年までの間にマレーシア国内及び海外で行ったイスラムとテロに関する演説11本を収めた演説集である。全体を貫くトーンは、イスラムとテロリズムを結び付ける考え方には承服できないという主張である。マハティールは、「ムスリム(イスラム教徒)の方がより多くキリスト教徒やユダヤ教徒によるテロにさらされてきた」と述べ、イスラム文明こそが複数の宗教の間の理解の促進に貢献してきたと強調する。さらにムスリムの聴衆に対して、信頼できる防衛力によって敵を抑止するというクルアーン(コーラン)の真のメッセージに従わなかった(誤った)者たちは(西欧との戦いに敗れて)没落したと述べ、近代化を恐れるなど呼びかける。マレーシアをムスリムとして近代化したという自負心に裏打ちされた発言であろう。

テロリズム自体については、まず、アラブ人の攻撃はユダヤ人のパレスチナ人に対する攻撃への復讐であって、パレスチナの領土問題がその根底にあり、宗教問題ではないのだと指摘する。そして、イスラエルのシャロン政権のような国家テロもあると非難し、現在は自由の戦士と賞賛されるケニヤッタもマンデラもテロリストといわれていた時期があるとしてその逆説性に触れる。さらに、「テロ行為とは、民間人に対する、武器あるいはその

他の形態による攻撃を指す」と一般的な定義をして見せ、マレーシアの前身であるマラヤ連邦が、市民権を得られない華人の不満を背景とするマラヤ共産党のテロを封じるために、華人に市民権を付与して問題を解決した例を挙げ、テロを支持する人々の心をつかめばよいのだと、解決策を提起する。

この辺りまでは、なかなか論旨明快なのだが、最後にアジア通貨危機も(投機という)経済テロの1例であると発言し、本当の問題は貧しい国が富める国によって抑圧されテロ行為をされ続けてきたこと、そして現在もそうされていることだ、と述べるに至って、論旨はやや脱線気味となる。いつものマハティール節と同様、矛先が先進諸国に向かっていくのだ。まあ、小国の指導者としては仕方のないところかも知れない。この他、本書で興味深かったのは、マハティールが演説の中で、米国人の研究者が1937年の時点で既に“Malaysia”という言葉で当時の英領マラヤを表現していた、と指摘した点である。マレーシアという言葉が誰が始めに使ったのかは、1つの研究テーマとして大いに興味を引かれるところである。以上のように、本書は多少のブレはあるものの、テロを考える上で、またマハティールの政治姿勢を考える上でも示唆に富んでおり、一読に値する演説集である。(佐藤考一)